胡椒息子

獅子文六著

結婚したら

主婦の友

毎月17日発売

主婦の友名作シリーズ

胡椒息子

定価370円

昭和39年12月15日　発　行

著者　獅子文六（しし ぶんろく）

発行者　石川数雄

印刷所　東京印刷株式会社

発行所　株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台1の6

振替東京180番

電話東京(291)1161(代表)

落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえしますから、お買い求めの書店か本社へお申し出ください

© 1964　Printed in Japan

胡椒息子

獅子文六著

主婦の友社

胡椒息子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

（カバー絵
さし絵）宮本三郎

親のある孤児達

一

七月も末になると、殆んどどの別荘も、東京から主人を迎へた。毎朝数を増してゆく花のやうに、次々に別荘の門が開かれる。Mホテルは、疾うから満員であつた。旧街道の洋書店や骨董店の前に、爽かな白衣の外国婦人達が眼立つて殖えた。まるでデパートの飾窓から連れてきたやうな、豪奢な盛夏の粧ひの夫人や、令嬢の姿も見られた。湘南あたりと違つて、この軽井沢は、冬に用のない土地だから、シーズンを迎へると、まる一年の休眠からパッと覚めたやうに、活気づくのである。

牟礼家の別荘へ家族が入つたのも、もう三日ばかり前であつた。英国のカッテージ風の二階洋館と、茶室好みの日本家屋を接続させた見事な普請で、この附近でも評判の別荘である。建ててから、十数年経つてゐるので、土地名物の青苔が、庭石にも樹立ちにも、染めつけたやうにベッタリ生えて、見るから涼風が湧き立つ気持である。

この二三日、白樺や落葉松に囲まれた洋館の窓から、ピアノの音が陽気に響き、夜は晩くまで明るい灯があふれてゐた。往来を通る人は、いかにも愉しさうな、富裕な人の別荘生活を羨んだ。しかし、今朝も台所で、肉屋の御用聞きは、顔馴染の女中さんと、こんな話をしてゐるのである。

「今年も、子供さん達だけかい？」

「えゝ。奥様は、ことによると、月半（つきなか）にお出でになるかもしれないけれど、旦那様は、どうせいらッしやりはしないわよ」

「そんなに仕事が忙しいのかい、こゝの旦那様は？」

「さァ、どうだかね」

「それにしても、奥様は会社に出てるわけぢやねえから、お子さん達と一緒に来たらよささうなもンだ。こんな大きな別荘を持つてゐて、勿体ねえぢやねえか」

「ホホ、。別荘なんかへ来なくても、奥様は面白い事が沢山おありになるンだよ」

「おやッ。子供をおッぽりだして、一人で遊んでるのかい。驚いたね。東京の奥様ッてものは、さうしたものかい」

「余計な心配しないで、サッサと御用聞きに廻つたらいいのに、また御註文を忘れて、電話で

呶鳴られるわよ」

「ほんとだ。他人の家の事どころぢやねえ。この頃は忙しくて眼が廻るやうなンだよ……ぢやァ、ロース二斤に卵が三百匁だね。さいなら、毎度ありがたうござい……」

肉屋はヒラリと自転車へ飛び乗つて、次の別荘へ急いだ。

実際、二人の話の通りであつた。牟礼家の別荘へは、去年も、一昨年も、三人の子供が来たばかりで、主人の牟礼昌造も、夫人の恒子も遂に姿を現さなかつた。今年も本邸から下働きの女中を連れて、年嵩の上女中が万事采配を振つてるが、その他に家庭教師の海野君と別荘番の爺やがゐても、主人も主婦もゐない家の中は、要の弛んだ扇のやうなものだつた。暢気といへばそれに違ひないが、どこかに空虚な寂しさのあるのは争はれない。現に台所で御用聞きと女中さんが、あんな高声で噂話をしたりするのも、規律のある家では見られない図であらう。

尤も、子供といつても、長男の昌太郎はもう二十一で、大学へ通ふ青年である。その次の加津美さんも、十八になり、来年は黎明女学校を卒業する。二人とも、親の側にゐなければ、寂しくて耐らないといふ年齢でない。寧ろ、そろ〳〵親鳥の翼が煩くなる時代であるが、末子の昌二郎君は、まだ十二歳である。東京にゐれば、半ズボンを穿いて、ランドセルを背負つて、麹町の修学院初等科へ通学する少年だ。手のつけられない腕白者で、邸内では固より、親類達

の間まで、鼻抓(つま)みになつてゐるが、なんといつてもまだ齢が齢であるから、夜中に眼でも覚めれば、ママが恋しくなる事もあるだらう。ママらしいママと、さうしてパパらしいパパとが——

二。

「あ、あ、あァ」

と、長男の昌太郎は、バルコニイの長椅子(ソファー)の上で、大きな欠伸(あくび)をした。読みかけの探偵小説が、パタリと床へ落ちる。

「どうしてかう、軽井沢ッてところは、退屈なんだらうな」

彼は芸妓のやうな、鼻筋の通つた細面を、顰めた。艶々とした黒髪が、一筋の乱れもなく、中央から綺麗に分けられてるが、これは舶来ポマードの効力ばかりでなく、一時間置きくらゐに鏡の前へ立つて、櫛目を入れるためである。顔色は蒼白いが、唇の色がクッキリと鮮紅を浮べてゐる。女中の説によると、若様は時々棒紅(ルージュ)をお使ひ遊ばすといふことだが、非常時日本の大学生たるものが、真逆そんな真似はしないであらう。

「もう銀座が、恋しくなつた？」

と、意味ありげに、昌太郎の顔を眺めて笑つたのは、妹の加津美さんである。兄が鼠フラン

のパンツを穿いて、白毛糸のジレットの下にカッター・シャツを着て、西洋映画俳優の室内姿のやうに身形(みなり)を整へてるのに、妹の方はホーム・ドレスの裾から、高々と素足の膝を立てて片手に歯形のついた板チョコを握り、もう一方の手でターキーといふ雑誌を拡げ、令嬢にあるまじき姿勢(ポーズ)を見せてゐる。さういへば、彼女の髪の刈り方も、兄と少しも違はない。分目が極端に右の隅に寄つてゐるのは、有名なレヴュウ女優の真似らしいが、かういふ髪にしたいばかりに、彼女は厳格な修学院女子部から、自由な黎明女学校へ転校したことを、両親はたぶん知らないであらう。容貌でも体軀でも、寧ろ男の子に近いから、兄の昌太郎とアベコベにしたらと、よく親戚の間の話題になるが、やはり彼女も十八の乙女で、いざ外出でもする時には、一時間も爪磨(マニキュア)きをして、三度もドレスを着変へたりする事が、一向珍らしくない。たゞ、家にゐる時は、いつもかうして、無精のやうな、乱暴のやうな、令嬢にあるまじき行儀をするのが、彼女の癖である。

「銀座なんて、季節外れだから、意味ないよ。今頃ノサばつてるのは、汗臭い人間ばかりだ」

昌太郎は、詰らなさうに、煙草へ火を点けた。

「なんとかいつてらァ。お兄様は、あたしが知らないと思つてるの。此処へ来る前の晩に、電話を掛けてきた女の人は、一体、なによ？」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

加津美さんの悪戯ッ児らしい眼が輝く。
「知らないよ、そんな事。第一、お前みたいな少女に関係のないことだ」
「ヘンだ！　人を子供扱ひにするもンぢやないわよ。アメリカぢや、十三でママになつた少女もあるわよ」
加津美さんはさういつて、兄のシガレット・ケースから、ウェストミンスターを一本引出して、口に銜へた。ライターで火をつけると、鼻から二本の煙を真直に噴出したところは、なかなか手慣れたものである。
「あァ、軽井沢なんて、つまらないなァ。テニスでもするより、なんにも遊ぶことはありやァしない。毎年、この別荘へ幽閉されるのは、やりきれないよ。パパやママは、なぜ葉山の別荘を明けとくンだらう。海へ行けば、こんなに退屈しやしないンだ」
昌太郎は、まだ来てから五日にもならないのに、すつかりこの土地に飽きてしまつてるらしい。
「葉山の別荘は、なか〳〵あたし達の自由にさせてくれやしないわよ。東京に近いから、利用の道が、大いにあるわよ。なにしろ、パパは実業界の巨頭だし、ママは社交界の花形だからね。フフン」

と、加津美さんは、まるで他人の噂をするやうに、両親のことを話す。

「一体、うちのオヤヂは、僕達のことを、どう思つてるンだらうな。友達に聞くと、オヤヂはとても煩いものだといふが、僕には意味がわからないよ。オヤヂはてんで家にゐたことがないンだから、叱られることも、可愛がられることもありやァしない。考へてみると、随分暫くオヤヂの顔を見ないぜ、元日の朝に会つたきりだ」

「そんなことといへば、ママだつてさうよ。一週間のうちに、晩御飯を一緒に食べる日は、いくらもありやしないわ。たまに早く帰つてきたと思へば、きつとお客様を招ぶ時よ。でもね、あたしはこの方がいゝと思つてゐるの。飽くまで女性の自由を、獲得(くわくとく)できるからね」

「生意気いふなよ。僕はあんな寂しい家庭を飛出して、早く外国へ行きたいよ。彼地で、オデット・コルベールみたいな令嬢と結婚して愉しい家庭をつくるンだ」

「フフ。お兄様も、よッぽど甘チャンね。そんなに早く結婚したいの？　結婚なんて最も晩くするのが、最も利口なのよ。パパとママを御覧なさいよ。二人で仲よく話してる時なんて、ありやしないぢやないの。両方でシカメ面ばかりしてるわ。夫婦なんて意味ない事の証拠だわ」

「それは、気の合はない同志が結婚したからさ。でも、お民婆やの話によると、昔はパパもママもとても仲がよかつたンだつてさ。パパがだん〳〵偉くなつてから、二人の間がすつかり変

つちまつたといふ話だぜ」
「ぢやァ、パパが悪いのね」
「さァ、どつちが悪いンだか。婆やもそんな事はいはなかつたよ。どつちにしても、今、仲の悪いのは確かぢやないか」
「さうよ。だから、あたしは夫婦なんて意味ないッていふのよ。お兄様は、まだ二十一の癖に、お嫁さんを貰ひたがつて、ウズ〳〵してるのね。いやンなつちやふな」
「バカ。誰がそんなことといつた」
「クロオデット・コルベールに憧れたり、薬師寺子爵の姫君に想ひをかけたりしてるぢやないの。ちやァんと知つてるわ。わァいだ」
「こら。承知しないぞ」
兄が手を伸ばして、襟首を摑まうとするのを、妹は素早く跳び退いた拍子に、灰皿を蹴飛ばして、真二つに割つてしまふ。
そこへ、女中が現れて、
「お嬢様、お電話でございます」
と、三つ指をつくのを、返事もせずに、兄にベッカンコをしながら、加津美さんは奥へ入つ

て行つた。

緑の海のやうな庭の樹立ちから、蟬時雨が聞えた。冷たい、湿つた風が、潮のやうに部屋を吹き抜けてゆく。軽井沢も、正午から暫くの時は、相当暑いが、三時になると、急に涼気が湧いてくる。

「お兄様、ほらこんなに獲つたぜ」

その時、末子の昌二郎君が、竊竿（もちざお）を持つて、五六疋の蜻蛉の羽根を掴みながら、庭へ出てきた。兄の昌太郎とは似てもつかない円顔で、眼までクリ〳〵と円い。帽子も被らず、裸足で、シャツも半ズボンも泥だらけ、顔まで丹下左膳のやうに汚してるのは、どこかで滑つて転んだのに違ひない。どう見ても、これが牟礼家の令息とは思はれない姿だ。

「なんだ、その風体（なり）は！　蜻蛉釣りなんて、みつともない真似をしてはいけないッて、昨日もいつたぢやないか」

昌太郎は声を荒らげて、叱りつけた。親から構はれない子供達なのだから、せめて兄弟仲良くしさうなものだが、昌太郎は少しも弟を可愛がらなかつた。東京にゐる時もさうだが、軽井沢へ来てからは、一層、弟を邪魔者扱ひにするのである。尤も、昌二郎君は、非常な腕白者で、兄貴の大切にする剃刀（レザー）で鉛筆を削るぐらゐ、朝飯前だ。それで嫌はれるともいへるが、そ

もそも、二人の性質がまるで反対なのが、根本の理由であらう。兄から見ると、昌二郎はガサツで、乱暴で、まるで貧乏人の子供のやうに卑しくて、ちつとも自分の弟のやうな気がしないといふのである。加津美さんも、これには至極同感のやうで、従つて、昌二郎君は、兄貴のみならず、姉さんからも弾劾を受けてゐるのである。

「だつて、とても面白いンだぜ」

昌二郎君は叱られつけてるので、平気である。

「昆虫を殺して面白いなんて、お前は残酷だぞ。そんなの、捨てて来い」

「やだァ」

「よし。そんなら、晩に散歩に連れてッてやらないから」

と、いはれて、蜻蛉は惜しいし、晩の散歩には行きたいし、去就に迷つてゐると、奥から消魂しい声を立てて、躍りながら、加津美さんが入つてきた。

「お兄様、素敵！」

「どうしたンだよ」

「当てて御覧なさい。お兄様にとつて、とても嬉しいニュース！」

「なんだよ」

「薬師寺様からお電話でね、今夜ダンス・パーティを開きますから、是非お二人でいらつしやいッて。春子姫からお直き〳〵のお電話よ。お兄様に、どうぞお宜敷くッて」

「バカ！」

「俄然、軽井沢の退屈解消したでせう——さて、あたしは何を着て行かうかなァ。イヴニング・ドレス二枚しか持つて来なくて、損しちやつたなァ。それより、早くお風呂だわ。ちよいと、花や。お風呂まだ沸いてないの。早くしなさいよ。間抜けねえ！」

と、加津美さんは、ダンス・パーティは七時から始まるといふのに、今から大騒ぎしてゐる。昌太郎も急に活気づいて、

「僕はタキシイドを持つて来なかつたから、学校の制服にするかな」

などといつて、長椅子（ソファー）から立上つた。

だが、面白くも何ともないのは、昌二郎君である。

「お兄様、僕、蜻蛉捨てた！」

「だから、どうしたンだ」

「だから、僕も薬師寺さんへ連れてッてよ」

「バカね。子供なんか、ダンスへ来るもンぢやなくてよ。あんたは、海野さんと花火でも揚げ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com